

ヘルシンキの老人ホーム

北欧の老人介護施設を見て回る中で、特に印象に残っている一つがフィンランドのヘルシンキ郊外にある施設である。ヘルシンキの中心街からバスに乗って小一時間。森が途切れて芝生の敷地が広がる中に木造の施設が建てられていた。10人ほどが収容できるこじんまりした老人ホームで、友人のお母さんがNPOを立ち上げて運営しているものであった。小さな施設であるが故に家庭的な雰囲気。入居者も和気あいあい。暮らしており表情も明るい。その表情がさらに輝いたのが幾人もの子どもたちが入ってきた時である。似た建物が並んでいて気づかなかったのであるが、老人ホームの隣に幼稚園があり、休み時間になると園児たちが施設に入ってきては、盛んにお話ししていく。子どもたちとのやりとりがお年寄りのエネルギーになり生き甲斐にもなっている。お年寄り子どもたちとの相性がとてもいいことを強

く印象付けられたのである。

「また明日」という空間

日本でもお年寄りと子どもたちが気軽に行き来できる施設があってもいいのにと思っていたところ、先日、東京都小金井市にある

交流スペースである寄合所の機能を持つが、アパートの1階部分にある5戸の壁を取り払って確保したスペースを上手に生かして、三つがほどよく調和し、温もりのある活動が展開されている。二度ほど足を運んだだけであるが、認知



老人は子どもと共に

農的デザイン研究所代表 蔦谷 栄一

「また明日」に出会った。NPO法人が運営し、デイホームと保育園、そして寄合所の三つの機能を提供している。すなわち認知症対応型通所介護のためのデイホームと、認可外保育施設としての保育園と、だれでも集うことのできる

症とされるお年寄りが乳幼児に繰り返し何度も話しかけたり、動き回る子どもを見守ったり、ボランティアでできた人が奏でるギターに合わせて童謡を歌ったりと、とても認知症とは思えないような活躍ぶり、表情も生き生きとしてい

る。子どもたちも安心して遊んだり昼寝したりしている様子を見てみると、この空間のすばらしさが体に沁みてきて、思わず体が熱くなってくるような感じがする。

お年寄りだからできる役割

三つの機能を一体化させての運営にはそれなりの苦労もあるようであるが、まさに現場の実情・実態を踏まえて生み出されてきた知恵・工夫といえる。そしてこれは大きな家族による地域のあたらしいコミュニティづくりでもある。親が仕事で時間に追われて子どもと接する時間は少なくなってしまうが、時間にゆとりのあるお年寄りだからこそできる役割がある。そうした触れ合いを通じて、孫の世代にお年寄りの経験・体験を伝えていく。高齢化がすすむ今だからこそ、農村での百姓仕事という生き甲斐に加えて、形はともかく、小さくていい、手作りによる、こうした空間が必要であり、各地に広げていく試みが求められる。